

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K13127

研究課題名（和文）保育活動における多様な音体験が子どもの育ちにとって持つ意味

研究課題名（英文）The meaning that diverse experiences of sound in early childhood educational activities have for children's growth

研究代表者

野口 紗生（Noguchi, Saki）

明治大学・研究・知財戦略機構（生田）・研究推進員

研究者番号：60634277

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、音の視点から子どもの経験を捉え、その発達の意味について検討することを目的として、保育場面における子どもの音体験について、観察調査及び音環境調査を行なった。音・音楽に注目する場面の分析では、子どもと保育者が共に音・音楽についての考え学び合うことによって、想像性や声のあり方について一歩深める経験を得られることが捉えられた。生活場面の分析では、日常音環境について考える機会は、子どもが音環境の性質を理解し活用する経験となること、保育者が音環境の保育的意味を考える契機となることが示された。加えて音響環境の改善が保育者の音への意識向上やコミュニケーションの深まりへとつながることも捉えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

保育における音環境は、これまで喧騒感や吸音不足等の課題が指摘されてきたもののその保育的意味の視点からの検討は少なかった。これに対し本研究では、子どもの経験とその発達の意味の視点から音・音環境の意味を捉え直し、保育的、物理環境的、双方の視点からその在り方を探求するとの点で新規的な取り組みと位置付けられる。また、子どもの音体験を活動場面と生活場面とに分けて検討した結果、音環境のもつ意味や検討すべき内容は異なるものの、保育者ら大人の音・音環境に対する感じ方、考え方が活動や園生活の質に深く影響することが捉えられた。これは保育関連分野の今後の可能性を拓く基礎研究として期待できる成果と考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research aimed at understanding children's experiences from the perspective of sound and examining the developmental meanings of these experiences.

In the analysis of scenes that focus on sound and music, it was found that children and teachers can gain a deeper experience of imagination and voice by thinking and learning about sound and music together. The analysis of daily life situations showed that the opportunity to think about the daily sound environment provides children with the experience of understanding and utilizing the nature of the sound environment, and provides teachers with the opportunity to think about the meaning of the sound environment in terms of early childhood education and care. In addition, the improvement of the acoustic environment was seen to lead to an increase in the teachers' awareness of sound environment and a deepening of communication.

研究分野：発達・教育心理学、音響学、保育環境

キーワード：音環境 子どもの体験 想像遊び 音楽 ワークショップ 保育者 吸音 音への気付き

## 1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで、子どもの育ち、学びにとっての音環境のあり方を探求するために、子どもの観点から音環境を把握する研究、音響要因が保育活動へ及ぼす影響に関する研究に取り組んできた。保育活動の観察を通じて、音環境は音楽や言語的関わりなど直接的に関与する場面以外の意義が見出され難いものの、子どもの聴き方、音の発し方、他者との活動のあり方といった側面と密接に関わるのではないかとこの所感を得た。

保育の場における音環境研究には、にぎやかさや吸音不足といった物理的環境面での課題が子どもや保育者に及ぼす影響、そしてその改善のための建築的対応に関する研究が多く、保育の内容面に関わる観点での研究例は少ない。そうした中で、環境音を聴くことを目的とした教育手法（シェーファー・今田, 2009）や、保育者が日常音環境を聴く姿勢を重視した音感受教育（吉永, 2015）など、保育法としての提案がみられる。これらは音を活動の中心に置いているとの点で音楽活動についての提案として位置付けられるが、このなかで“いかに聴くか”との点に焦点を当てている点で、本研究と親近性を持つものである。

## 文献

- [1] R. マリー シェーファー・今田匡彦 (2009). 音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション<増補版> 春秋社.
- [2] 吉永早苗 (2015). 子どもの音感受の世界-心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探求 萌文書林.

## 2. 研究の目的

本研究では、音の視点から保育場面での子どもの経験を捉え、その発達の意味について検討することを目的とする。具体的には、子どもが周囲の音を聴き、意味付けていく、といった音体験について、物理的な音事象、音に関わる文化・社会的規範と関わりつつ、実際の音体験がいかに形成されていくのか、そして音体験が子どもの育ちにとって持つ意味はどういったものであるのかを検討する。

## 3. 研究の方法

保育場面における子どもの音体験について、音楽活動など音・音楽に注目する場面と生活場面とを取り上げ、検討を行う。具体的な研究方法を以下に示す。

### (1) 音楽活動など音・音楽に注目する場面

特徴的な音・音楽実践を調査対象とし、観察調査・インタビュー調査を行う。

#### 研究対象

- ① I園（岐阜県）：アート活動を重視した保育を展開しており、音の面では音楽家I氏を招聘した音楽実践を定期的に行い、音環境を実践の資源として用いているとの特徴がある。
- ② K園（埼玉県）：ノイズからの脱却を掲げた保育との文化的特徴と、それにより静かで落ち着いた音環境が実現されているとの物理的な特徴を持つ。また、聴くことを重視した音楽実践が展開されている。

### (2) 生活場面

観察調査及び音環境調査を行い、音事象とその保育への影響を、心理学的・工学的手法を用いて捉えることに取り組む。加えて、保育の質と音環境との関係についての視点ももち、音環境づくりが保育に及ぼす影響について、及び保育者向けワークショップの実践など音環境の保育的意義についても検討を行う。

#### 研究対象

- ③ U園（埼玉県）：異年齢合同の室を使っており、室内に遊びコーナーを常設しているとの特徴を持つ園である。音の面では園長らが喧騒感や音の混じり合いに問題意識を持っている。
- ④ SA園（神奈川県）：保育室の騒がしさに課題意識がもたれており、該当クラスの担任が音環境を改善したいとの考えを持っている。
- ⑤ SI園（神奈川県）：園長が音環境への課題意識を持っており、保育者間で課題意識を共有したいとの考えを持っている。
- ⑥ ドイツ園3園（デュッセルドルフ）：A園（認可・シュタイナー幼稚園）、B園（認可・プロテスタント系互助団体運営幼稚園）、C園（認可外・日本人幼稚園）

## 4. 研究成果

### (1) 子どもの想像を深める経験としての音楽活動：想像遊びをもとにした歌づくりから

I園では年間を通してテーマに基づいた想像遊びを展開するとの保育を実践しており、年長児はプロの音楽家（I氏）を招聘した音楽ワークショップ（10月開催）において、クラスの想像遊びに基づいた歌づくりに取り組む。調査ではこのワークショップ場面を対象とし、子ども・保育

者と I 氏との関わり合いのあり方と、それが子どもにとりどのような経験へとつながるのかについて、検討を行った。歌づくりの過程を分析した結果、子ども・保育者、アーティストが共に作りつつある歌を、相互に、また子ども間での考えの違いも含めて、納得し得る歌とは何かを提案の中で探索することで、子ども・保育者、アーティストが共に「自分のもの」と感じ取られる歌が作られることが捉えられた。これは「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」との領域表現において、子どもが想像世界をいかに感じ、いかに考えているか、そしてそれを音楽としてどのように表現したいのか、といった、自分自身でも気付いていない音楽の在り方を、保育者の援助を受けつつアーティストと共に探求することによって一歩深められることについての楽しさを示すものと考えられた。

(2) 歌声のあり方を探求する経験としての歌活動：心に響く声への気付きに関わる子どもと保育者とのやり取り

K 園において、実践者へのインタビューを行った結果、「コンサートで唄う」活動に向けたプロセスとして、以下が語られた。

「何の歌を唄おうか」と子どもと相談することから始まります。そしてその歌を伝えていくために、歌の意味を子どもと考えていきます。唄う際は、初めは全員ではなく少人数で歌い、子どもに「どう思う？」と尋ねます（例）子「キレイな声」「怒鳴っている」保「素敵に唄うと良い気持ちになるね」等）。こうしたやり取りを繰り返して丁寧に伝えていきます。  
(インタビュー内容をもとに申請者が記述)

こうした経験の後、子どもたちから「(他児の様子をみて) なんだか怒鳴って唄っているよ」「(自分は) お母さんを感激させ(るように唄い) たい」などの発言があったことが語られた。なお当該活動は年長児を対象としたものであったが、年少の頃からその様子を見学し、感じたことを尋ね、言葉などで表現する経験(例) 保「どうだった？」子「キレイだった」等を重ねるとのことであった。

ここでの子どもの経験は、唄う声について保育者と共に感じ、それを言葉で表現することを通して、心地よい声、心に響く声のあり方について探究する経験と捉えられた。子どもの感情性認知の育ちとの関連についての検討が今後の課題である。

(3) 生活場面における音への気付きを促すワークショップ

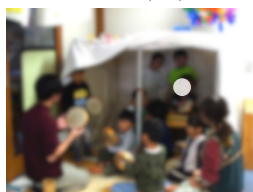
3~5 歳児の異年齢保育を行なっている U 園にて、年長児を対象とした音体験ワークショップ「きもちよい音ってどんな音？」(全 2 回)を実施した。第 1 回は日常の生活で聞こえてくる音に耳を澄ませその音について考えること(図 1 (a1), (a2))を、第 2 回は「くつろぐ・音を楽しむ・静かに遊ぶ」コーナーを体験しそこでの過ごし方や楽しみ方を探ること(図 1 (b1), (b2), (b3))を目的とした。その結果、子ども・保育者ともに日常の音を振り返り、皆にとって気持ちよい音や他者の気持ちよい音を知ること、気持ちよい音で過ごすために皆で配慮・工夫したいことについて考えるきっかけが提供された。



(a1) 「うるさいと思ったら手を挙げよう」 (a2) 「気持ち良い音で食器を片付けてみよう」



(b1) リラックスコーナー



(b2) 音の実験室



(b3) 絵本コーナー

図 1 ワークショップ実施風景

(4) 保育の質向上に向けた取り組み：音環境と保育との関係についての調査・実践から

(4-1) 吸音性能の向上が子どもと保育者のコミュニケーションに及ぼす効果の検証

部屋の吸音性能に課題のある SA 園にて実施した吸音性能向上実験(2017 年に実施[文献 3])について、通常状態(条件 A: 平均吸音率・ $\bar{\alpha}=0.14$ )、吸音材設置条件(条件 B:  $\bar{\alpha}=0.30$ ・条件

C:  $\bar{\alpha}=0.20$ ・条件 D:  $\bar{\alpha}=0.25$ ) の計 4 条件で、音環境の状態 (図 3) が子どもと保育者のコミュニケーションに及ぼす影響 (表 2) の観点から再分析を行なった。吸音材の性能向上に伴って音環境が改善し吸音による音声明瞭性能の向上により一つひとつの会話が聞き取りやすくなり、保育者が必要に応じて子ども同士のコミュニケーションに介入すること、子どもの声に耳を傾け援助するという援助行為をサポートすること、等の影響が捉えられた。これにより子どもと保育者とのコミュニケーションが深まることが推察された。音響環境が改善されることは、保育者が言葉を返す、あるいは見守るといった支援行動をより適確に判断することを支え、それにより子どもが落ち着いて遊び込めるようになった様子も捉えられた。以上より、適切な吸音性能は、保育の場において即時的な状況判断を行う保育者の援助行為を支え、その結果子どもとのコミュニケーションを深める効果があることが示唆された。



図 2 吸音材設置風景 (条件 D)

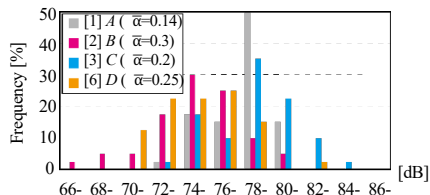


図 3 各条件での騒音レベル ( $L_{Acq,1min}$ ) 頻度分布: 遊び場面

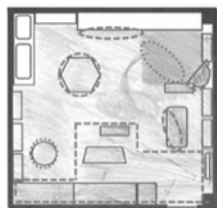
表 1 音環境がコミュニケーションに及ぼす影響: 保育者へのインタビュー調査から

Condition	コミュニケーションへの影響
A: ( $\bar{\alpha}=0.14$ ) [設置前]○ [設置後]●	○音環境への不快感はあるが、保育への影響は特に感じていない ●周りの音に負けないように、子どもの声が明らかに大きくなった ●遊び時の子どもの喧嘩や声は気付けない、何か話していることに気付いても聞くことができない ●条件 C より音の抑揚を抑えることが増えさらに気を付けるようになった ●片付けの合図でピアノを弾く回数は、条件 C より増えた
B ( $\bar{\alpha}=0.3$ )	・遊び時、子どもの小さな喧嘩を聞けるようになった ・音の抑揚をつけられるようになった (ピアノのペダルを使う、読み聞かせ時声の抑揚をつける等) ・子どもも歌を歌いやすいと思うし、歌詞を言葉として大事にできそうな感じがする ・遊び時、子ども同士でコソコソ話したり遠くの人に声を届けるなど、会話を楽しむ場面が見られた ・子どもが担任の喧嘩をすごく聞いていた印象だった
C ( $\bar{\alpha}=0.2$ )	・子どもの声が大きくなった ・子どもの喧嘩が聞きづらい ・楽器遊びをしている子どもを別の遊びに誘導した ・響きすぎため、音の抑揚を抑えるようにしている ・片付けの合図としてピアノを弾く回数が増えた ・声の大きさを子どもに伝えることが多くなった
D ( $\bar{\alpha}=0.25$ )	・遊び時、子どもが別の場所の遊びにも気づけるようになったと感じる ・遊び時、別の場所の遊びに気を配り、反応できる ・読み聞かせや音楽活動のしやすさは条件 B と同様 ・物をたたき楽器遊びなど音を楽しむ遊びができるようになった

文献[3] 野口紗生・上野佳奈子 (2019) . 保育室に求められる吸音性能に関する現場実験 日本建築学会技術報告集, 25(60), 719-723.

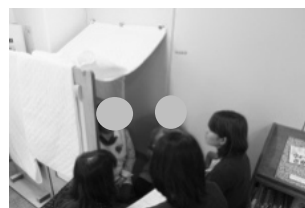
#### (4-2) 保育者の音への気付き促すワークショップの実践

音環境への意識面で課題のある SI 園にて、保育者向けワークショップ「音から考える保育環境づくり～できることから始めてみよう～」を実施した。音環境についてのレクチャー、および音環境の可視化、吸音体験などを実施した結果、保育者間で音についての課題意識を共有すること、また吸音材を用いた音環境づくりに取り組む見通しをもてること、等の効果が得られた。この実践で得られた効果を踏まえ、今後は保育と音環境とのつながりを見出し、ワークショップのプログラム開発に取り組むことが課題と考える。



(a) ワークシート解答例: 5 歳児室

遊びの場面を思い浮かべて、  
静かな場所[青(表内点線部  
分)]・にぎやかな場所[赤(表  
内点線部以外の塗りつぶし部  
分)]を色分けしてみよう



(b) 吸音材で囲ったコーナー体験

図 4 ワークショップ実施風景

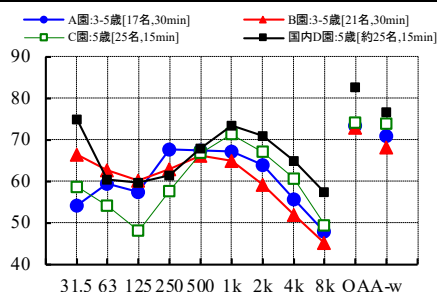
#### (4-3) 音環境の改善が保育にもたらす意味: ドイツにおける音環境と保育者の意識の調査から

日本と類似した社会的背景を持ち音環境面で先進しているドイツの保育現場にて実施した調査 (2017 年に実施[文献 4]) について、音環境の実態と保育者の意識の観点から詳細な分析・検討を行なった。ドイツでは DIN18041 にて保育施設では学校教室よりも高い吸音性能が規定され

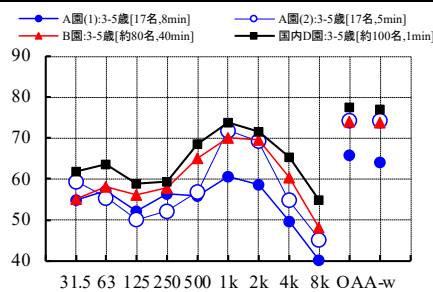
ている (川井ら, 2018)。運営形態の異なる3園 (A園: 認可園・シュタイナー幼稚園, B園: 認可園・プロテスタント系互助団体運営幼稚園, C園: 認可外・日本人幼稚園) にて音環境調査と園長へのインタビュー調査を実施した結果、ドイツの保育室では吸音材が使用されており音響性能が高いこと、子どもの声や保育中の音環境の状態についてなど保育者が保育にとって相応しい音環境への考えを明確に持っていることが、捉えられた。その結果、ドイツでは日本と比べて騒音レベルが低く、特に子どもの声の帯域がより低いとの傾向があることが捉えられた。一連の調査の中で、優れた音響空間での保育経験が、保育者の音への意識を高めることも推察された。

表2 ドイツにおける保育者の音への意識: 3園のインタビュー調査から

◇気になる音 ▲施設外部の人から指摘された音		◎保育的対応	*環境設定
◇子どもが落ち着かない時期の遊び音	◇片付け時	◎子どもと共通認識のある歌を鼻歌で歌い、子どもの判断・行動を促す	
A ◇自閉症児の行動音	◇物音 (特に木質床に木製の椅子や玩具がぶつかる音)	◎にぎやかな子どもには近くに行って個人的に話す	
		◎平常心で接する	
		◎障害児の行動は無理に止めない	
			*落ち着いた光環境を設定
◇雨天時などストレスが溜まりがちな時の室内遊び音	▲外で遊ぶ際の活発な遊び音 (声など)	◎にぎやかな子どもにはまず集団内で気付くのを待ち、難しい場合は個別に対応する	
			*廊下を動的な遊び空間としたことに合わせて天井を吸音仕様に変更
			*園庭で使用する移動玩具 (自転車等) には車輪部へ防音対策
C ◇泣く声	▲屋外のプールでの興奮した声	◎泣く子どもへは個別に対応	
		◎興奮した際は落ち着くよう子どもたちと話す	



(a) 室内遊び時



(b) 屋外遊び時

図5 活動時の騒音レベル調査例 (遊び時): 調査園3園及び日本国内園(D園)

文献[4] 野口紗生・吉澤寿子・佐藤将之・小西雅 (2017). ドイツにおける保育施設の音環境調査 -保育中の音と子どもの声に対する保育者意識- こども環境学研究, 13(1), 54.

### (5) 新しく出てきた課題

本研究の実施を通して、子どもの音体験における大人の役割の重要性と物理的な音環境についての大人の側の理解の重要性との新たな課題が捉えられた。音に関わる経験を保育者が子どもとともに深めていく過程において、保育者が音・音楽や生活場面の音を面白がったり、それについての子どもの反応から子どもについての気づきを得たり、あるいは子どもの音についての考えに学んだりする姿が見られ、こうしたやり取りによって、子どもにとって意味ある経験が創出されることが推察された。今後は子どもの経験を捉えつつ、そこでの大人のあり方について、物理的環境との関わりについても適宜捉えつつ、検討する所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 (語り手)若盛正城、若盛清美、(聞き手・執筆)野口紗生、船場ひさお	4. 巻 193
2. 論文標題 【インタビュー】幼保連携型認定こども園こどものもり 穏やかな環境は豊かな心を育む - 居心地の良い音環境をつくるために -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音響技術	6. 最初と最後の頁 6-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Saki Noguchi, Kanako Ueno	4. 巻 -
2. 論文標題 Improvement of the sound environment for supporting communication at nursery facilities: Approaches for changing room acoustics and users' minds	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 23rd International Congress on Acoustics (ICA 2019)	6. 最初と最後の頁 4122-4129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18154/RWTH-CONV-239286	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Saki Noguchi, Hisako Yoshizawa, Masayuki Sato, Tadashi Konishihi	4. 巻 -
2. 論文標題 The sound environment of German preschools and preschool teachers' thoughts about sound generated by children	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 23rd International Congress on Acoustics (ICA 2019)	6. 最初と最後の頁 5953-5960
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18154/RWTH-CONV-239560	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野口紗生
2. 発表標題 想像遊びをもとにした歌づくりにおける協働の在り方
3. 学会等名 日本保育学会第77回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 野口紗生, 小向真央, 上田哲平, 上野佳奈子
2. 発表標題 音から考える保育環境づくり - 保育者による音環境づくりに向けたワークショップの実践 -
3. 学会等名 こども環境学会2020年大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高隆嘉, 野口紗生, 上野佳奈子
2. 発表標題 保育園における年長児のための音体験ワークショップの実践
3. 学会等名 日本音響学会春季研究発表会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ドイツ	Heinrich Heine University Duesseldorf		